学園黙示録～機械鎧の男～

‡ 千葉の墮天使 ‡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録〜機械鎧の男〜

【Nコード】

N14170

【作者名】

✪千葉の墮天使✪

【あらすじ】

興味を持ったことを、徹底的にする事によりIQ200以上の天才兼オタク、しかし様々な事を知るうちに、自らの人生の楽しみを見いだせなくなり初めている『北里司』

何の面白みも無い人生、毎日変わらない日常に嫌気が差し、ある日自殺をする。しかし、死んだはずの司は、目が覚めると目の前には黒尽くめの老人、自らを悪魔だと名乗り司と契約をしようと言い出し、過激的な世界に…学園黙示録の世界に転生する、契約の際に代償をはらう事により力を貰う…

プロローグ 修正(前書き)

ノリで書きました

遊びなんで、批判はしないでね？(ニャるニャる)

プロローグ 修正

? 1 「…」

? 2 「…」

? 1 「…」

? 2 「…」

・ ・ ・

? 2 「いい加減だんまりは、やめないかのう?」

? 1 「あんたは、誰だ?」

? 2 「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀じゃろう?」

? 1 「すまない、俺の名前はk「僕の名前はミカエルじゃ」…俺の名前はき「因みに人間ではなく、お主ら…人間でいう悪魔じゃ」…ミカエル貴様は俺に名前を言わせる気が無いのか?（笑顔）」

ミ「何故じゃ?」

司「ハア…（呆）まあ、いい俺の名前は、北里司だ」

ミ「知つとるよ?」（笑）」

ピキ…

司「なら、何故俺に名前を聞いた?（笑顔）」

ミ「お茶目じゃ」

プチ…

司「爺がお茶目とか、笑顔で言うなキモイ、しかも爺の癖に」（笑）
”とか” 使ってんじゃねえよ、それになんだよ此処は俺は自殺した筈だろうが、死んだはずなのに、目が覚めると知らない所とか、ドリシヨ（ドリーム小説）の定番かよ、目の前にはうざい爺が一人突っ立ってるし、オマケに悪魔だと？ドリシヨの転生は”綺麗な女神が謝罪”が定番だろうが！？

まあ、俺自殺だし？

謝罪は無くても良いが、あんなミカエルとか言う爺さんとか、有り得ねえだろうが！？

ミカエル…悪魔…！？

おい、ミカエルお前

かつては新バビロニア地域の神々、あるいは神の諸側面を表象する存在でもあったミカエルか！？」

ミ「んあ？」 ポリポリ パラパラ

長々と司が喋ってたので、寝転がって尻を掻きながら、マンガを読んでいる。

司「おい、どうなんだ！？」

読んでいたマンガを閉じながら、司を見ながら

ミ「そうじゃが？お主なかなか、博識じゃのう？」

よしっ！！定番だからな

司「って事は、何か能力をくれて、転生だよな？」

ミ「能力に限らず、行ける世界など様々な事を指定できるぞ?…代償さえ払えばのう」

代償、ちよつと不気味な事を言ってるが…

司「よつしゃー!!!!!!」

なら、やっぱ戦闘系の世界でチート設定だよな

ミ「因みに、リリなの、ネギま、ギアスは代償を最低でも、二つは貰うぞ?」

くっ…マジかよ

司「?代償つて??二つつて???」

主人公やつと気付いたよ(笑)www

ミ「聞いとらんかったのか?お主はありとあらゆる事を指定出来るがそのためには、五体のどれかを代償にするんじゃ」

ミカエル代償の部分は今初めて言ったな(笑)(笑)

司「(啞然)マジか……………」

数は少なくして尚且つチートの強さを…

よし、これで行くか

ミ「名案でも、浮かんだかの?」

司「嗚呼

先ず転生先は、H・O・T・Dの世界で、んで、容姿は…ネギまの

ラカンの奴隷の時みたいなき感じにして、次に俺の四肢を機械鎧オートメイルに、素材は、任せるが最も頑丈に、んで、握力は石の柱を簡単に握り潰せるぐらいで、殴った時の力を厚さ20センチの鉄板を楽に貫通出来るぐらいにして、普段は力をその時の年齢の平均に置いて、脳からの信号で、力を解放出来るようにしてくれ、勿論脚力も腕力に比例して上げてくれよ？

最後に、地球上の武術をすべて使えるようにしといてくれ
因みに、アニメとかマンガの武術もだからな」

ミ「厨二病じゃの…まあよい、代償は？」

司「四肢を全て！！」

ミ「ほほっ、思い切ったのう…これは、思ったより楽しめそうじゃ
(笑)

オマケじゃ、

機械鎧は他の者から見て分からないように、体に合わせて成長するようにして、外見と感触を全く同じにしてやろう。

では、第2の人生をH・O・T・Dの世界を楽しんできなさい」

司「おう！！」パッ

ん？パッ？

あれ何故かな？

浮遊感が…って…

司「定番通りかあ！！！！」

司はH・O・T・Dの世界に落ちていきました(笑)

ブログ 修正（後書き）

やっぱり、転生先に行くときの定番は穴だね（笑）（笑）

haruさんのご忠告通り直して、再投稿だよ〜

第一話（前書き）

これからは、前書きを無くします（笑）

第一話

ミカエルに穴から落とされ、転生後目が覚めるとベットの上で寝ていた…

司「…知らない天井だ…」

言うことが無かったので取り敢えず、定番通りの台詞を言ってみた

(笑)

周りを見渡し…

司「てか何処だ？此処…」

まあ、転生だからね(笑)知らない場所ってのは、当たり前(笑)

質素な八畳程の部屋に、小学生が良く使っているような、勉強机の上
に手紙と、何処かで見たことのある鞆…

司「てか俺のじゃん…」

おっ 有り難い事に俺の財布やら、何やらの必需品が入ってんじや
ん

手紙か何々…」

ミ(頭からの信号で、リミッターを外すという様なことを言ってお
ったが、ちよつと変更事項があるんじや。

リミッターを外すと言ったが、切り替えるという物に変えさせても
らった

やり方は、切り替えスイッチを頭の中で、想像してもらえばよい。
因みに時間軸は、原作開始の二年前じゃ、殺られないように準備を

するんじゃないな。

P・S そつちで必要かと思い、財布やら、証明書を送つといたぞい、中身は触つてないから知らんがの)

なるほど、まあ支障はないな。

なら…先ずは家を建てるか、そうだな…高城沙耶の家より、小さい位の家を造つて、地下に核シェルターとか作つて…やっぱ銃や刀は買つていた方が良いよな…ん？

金は大丈夫かつて？

伊達や酔狂で、IQ200の天才とか言われてないからね 軽く高城さんの家10軒位買える金が有るよ？

いや、軽く2、3時間で書いた論文で金が貰えるからね(笑)他にも、プログラミングのプログラム組んだり色々やってたらね、

原作開始まで、二年か…生徒に今頃高校生つてのもな…教師の補佐として、原作開始の時につければ良いかな？

2、3億寄付金として、渡せば了承してくれるだろう…くっくっくっ…

ん？教員免許？

取つてはいるが、某不幸人間みたいに、踏み碎いて再発行してないんだよね(笑)

んじゃ、足つた二年しかないから、さつさと取り掛かるか…

第一話（後書き）

書いてて思ったことがあります…
転生ってかトリップじゃね？（笑）

今回は、主人公の紹介をしたいとおもいます（笑）

主人公人物設定

名前 キタザト ッカサ
北里司

年齢 16歳

開始時は18歳

これから下は、18歳の物

身長 179センチ

体重 92キロ

容姿

『ネギま』のジャック・ラカンを縮めた感じ

性格

キレると、4、5分は弾丸トークのごとく、息継ぎをしているか分からない様子で喋る。

興味の持ったものには飽きるまで、延々と取り組む事で、IQ200という、天才。

一般的に当たり障りの無い性格で、全ての者に平等だが、人間の屑…紫藤みたいなやつは、利用できるだけ利用し、容赦なく斬り捨てるような一面を持つ

意外と家事全般をこなし、料理は一時期興味を持ち取り組んだため、日本食は勿論の事、中華、フレンチ、イタリアンと全て、高級レストラン等、比じゃないほど上手い。

設定

前世で天才と呼ばれ、様々な仕事をしていたため、財布の中身は常に100万以上入っており、カードはゴールドで、銀行に千兆円を優に越す額を貯蓄している。

ミカエルに四肢を代償に行ける世界と機械鎧、自らの容姿、様々な武術を扱える為、機械鎧の性能と合わせれば最強

主人公人物設定（後書き）

次回は、原作開始
半年前から始まります。

第二話

あれから、一年と半年が過ぎた

ん？端折らず書けつて？家建てたり、銃器を買っているところを読みたいかね？

まあ、一応現状報告はしとくな、今は家（地下四階までのに核シエルトター付き）を建てて、車も一応買った車種は知らん、興味ねえもん（笑）

今俺は、原作でお馴染みの藤美学園に来ている。何をしに来たかというと、校長に明日から教師の補助としてか、教育自習生としてか雇ってくれないか、交渉し終わったところだ。

司「いや、お金の力って偉大（笑）（笑）」

因みに、明日から教育自習生として、此処に来る事になった。

ん？何故、原作開始からまだ半年も有るのに、教育自習生として学校に行くかつて？原作キャラとして仲良くなるため（笑）

だってさ、原作開始時に直前に教育自習生として俺が来たとして、怪しまれたら面倒だからね、まあ、あいつらの場合心配せんでも良いと思うがな、念には念をってやつだな

冴子は、剣道場に行けば会えるだろうし、麗もどこかの、道場か体育館にでも行けば会えるだろうが…

孝と沙耶、コータって部活やってんのかな？

まあ、教育自習生だから授業を見に来たって言えば、良いかな？

…ん、まあ何とかなるだろう…大丈夫だよな？

明日考えよ...

第三話

さて、今の状況を簡単に説明しよう…

場所、藤美学園の剣道場

手には竹刀、鏝迫り合いの状態で動かない毒島冴子と俺…訳が分からん…こうなった訳は少し前に戻る…

・
・
・

翌日、初日だし、ちょっと早めに学校に来たんだが…

司「暇だ…」

何故だ…今は7:00だから、授業の準備とかで早めに学校に来るんじゃないのか…?

司「なんで誰も来てないんだよ…」

学校の鍵を管理人さんに開けてもらったから、まさかとは、思ったから…

よし、暇だから学校の散策でもしとこ…

つて事で、確認というか下見も兼ねて、剣道場に来たんだが…

?「貴様は、誰だ？」

こんな時間に藤美学園にスーツ姿で居るということは、教師か?しかし私は、貴様の顔を見たことがない…それに、教師としても随分

若く見えるが…」

司「あのく、見たことがないと言ってもしいきなり、木刀を向けるのは、止めてもらってよろしいでしょうか…？」

因みに言うなら、俺は今日から、藤美学園に教育自習生として、来た北里司だ。因みに、年は18な、ほれ…教員免許書だ。」

と言いながら、教員免許書を前に突き出す。

冴子「失礼した。

私は、毒島冴子。

ここの二年生で剣道部だ。しかし随分若いな…教員免許は大学を出ないと、取れないんじゃないのか？」

やっぱりそこ聞く？

司「大学はアメリカに留学して、出ているから安心していいぞ。

因みに言うなら、君の名前は知っているよ、今年の剣道で”全国大会優勝者の毒島冴子さん”？」

ふっ…昨日調べただけだかな…!!

冴子「知っているという事は、貴方も剣道かそれらの武術を？」

司「ん？そつだが？因みに、自分で言うのも何だが、強いよ。」

様々な武術の知識が有り、それが使えるからね…なんか、この流れって…

冴子「ほう…では、手合わせをお願いします。」

やっぱりかー！？

司「いや「今はまだ、7：10分だ、時間がない…という理由で逃げたりもしないし良いだろ？」…ハア、分かったどちらかが、1本取ったら終わりな…万が一、遅刻とかなったら洒落にならんし…」

という感じで、今この状態です…

冴子「考え事とは、余裕じゃないか。」

と言いながら引き胴をしてきた…おいおい、早いな流石、全国大会優勝者…長いな…チャンプで良いか…

司「早いな、流石チャンプ」

取り敢えず、軽口を言ってみた（笑）
これで、苛々して乱れてこないかな…

冴子「ありがとう、しかし、そちらはそれを止めて、私に話し掛けてくるとは…随分余裕だね…」

ん？ノってきた？

司「ん？怒った？（笑）」

冴子「ちよつと怒ったかもね、それに、その見透かしたような態度が気に食わない！」

「またも、喋りながら仕掛けてくる…今度は突きを…」

司「ちよつ！早っ！！、防具着けてないから、それ食らったら死ぬでしょ！！！」

「マジ危ないんだけど!？」

冴子「君は、喋るな!!」

「苛々する。」

「ええ、んな横暴な…」

「おつ、ちよつと今までより、振りが大きい…合わせるか…」

司「よつ、ハイ終わり。これで一本ね?」

「素早く間合いを詰め、竹刀の物打ちと言われる部分を、首もとにやり言う」

冴子「つな!？」

「ふふ 驚いてるな…」

司「んじゃ、この竹刀何処に片付ければいい?」

「首もとから離しながら、戯けながら聞く…」

冴子「私は、本気で打とうとしていた、なのに何故、君「一つしか、変わらないから、二人の時は司でいいよ?俺も冴子って呼ぶから」
司さんは「さんも要らない」司は打たなかったんですか?」

司「何故って、女の”人”は、打たない事にしてるんだよ…それに
冴子みたいな、綺麗な女性を打つ訳無いじゃん？」

…って、30分以上あれから、経ってんじゃない？
じゃあな！冴子」

冴子「綺麗…／＼」

さて、もう7：48か…職員室行く前に、保健室のあの人と逢つと
くか…

司「失礼します。」

？「ん」？

君だあれ？生徒？随分早いわね…さては、ベッドでも借りに来た
かな…？」

この人は、俺がスーツを着ているのが見えないんだろうか…

司「いえ、今日から教育自習生として此処に来た、北里司です…あ
の、職員室は何処でしたっけ」

まあ、実際覚えてんだけどね…

静香「ああ、そういうえば昨日、他の先生が言ってたわねえ…私
は鞠川静香って言って、見ての通り、この学園の校医ねえ…。だか
ら、司君は「静香先生より年下なので呼び捨てで構いませんよ？」
あらあ？そう？でも司君って呼ぶわねえ、だから、司君はスー
ツを着ているのねえ…」

どうやら、スーツを着ているのは見えてたようだ（笑）

静香「私も、いまから職員室行くから、連れっけてあげるわよ〜」

よし、取り敢えずコンタクトは出来たなにしても…本当にデカいな…
ん？何処がつて？胸だよ！胸！！たしか、108のJカップだっけ？

まあ、その後、他愛もない世間話をしながら、職員室に行き、先生
方に挨拶した後、集会に出て…俺が紹介された、なんか校長すげー
熱弁してるよ…何をかって？俺のことだよ…と、終わった

司「ええ〜校長先生に紹介された、北里司です。年は君達に近く1
8と近いですが、一応、アメリカのハーバードを出ているので、バ
カではないと思います（笑）」

笑いながら、ちょっとした、冗談を言うのと生徒達がクスクス笑って
くれた…いや〜、シーンとなったら気まずくなってたよ

まあ何十人か、ハーバードを出てるって事に吃驚してるけど（苦笑）

司「たまに、授業に連絡無しで行くので、その時はよろしく願
いします。（ニコッ）」

軽く微笑んだ後お辞儀をし、顔を上げて壇上を下りると、女子が何
名か顔を赤くしていた、風邪だろうか？その内の一名と視線が会っ
たので、

あとで、保健室行けよ〜と思しながら、微笑むとさらに、顔を赤く
して顔を反らされてしまった…何故？

その後、今日は一年生の教室を回って授業が終わった。

放課後…

静香「どうでしたあ？」

教育自習生としての1日わあ〜」

椅子に座っている俺に視線を合わせながら静香先生が話し掛けて来た…

今、胸が凄い揺れ方したぞ？

司「…ええ…まあ一年生の何人かと仲良くなれたぐらいですかね…

それより静香先生、槍術部って有りますよね？

何処でやってるんですか？」

静香「第2体育館ですよ〜」

何処でやってる分かんないので勝手に作りました

司「第2体育館って、何処ですか？」

第2体育館って、んなもん造ってんのかよ此処は…

静香「剣道場って分かりますう？」

司「ハイ」

ってというか、朝行っただし…

静香「そのすぐ横にもう一つ剣道場みたいな建物が有るでしょう？
それですよ」「鞠川先生、部員が足を捻挫したみたい何で、保健室
に来て下さい。」「じゃあ場所は分かりますよね？私保健室行っ
てく
るんで。」

ああ…そういえば、剣道場よりちょっと小さいぐらいの、建物が在
ったな…

第四話（前書き）

すみません。
遅れました…

第四話

職員室を出ると、何故か目の前に小室孝が居ました…

…普通に原作メンバーと対面かよ…

孝「…邪魔なんだけど」

司「ああ、すまん。」

なんか、素っ気なく返しちやたよorz

孝「ああ、あんた教育自習生とか言われて、校長に馬鹿みたいに褒められてた先生か、俺は1年の小室孝、よろしく」

あつちから、自己紹介してくれたよ…まあ、手間が省けて丁度良いや

司「俺は、北里司で集会の時も言ったけど、殆ど年同じだから、周りに他の先生方が居ないときは、今みたいにタメ口で良いよ？」

そっちの方が話しやすいしね〜

孝「了解つす。」

んじゃ、ちよっと職員室に用があるんで…」

司「ん、じゃあに〜」(笑)

なんで、職員室？」

呼び出しかな？

孝「…変な奴…（苦笑）」

司「さて…どうやって、入ろう…」

見学？いやいや…

興味があるから、と言つか…全ての武術出来るからな…槍術も…ウシツ有るな！

司「よし…」

第2体育館の扉に手をかけた、その時…

？「あつ、あの！司先生、第2体育館に用が有るんですか！？」

ん？宮本麗か？

…誰？あれ…どっかで…

司「槍術部に興味が在ってね。…すまないが、君、何処かであったかな？」

軽く微笑みながら聞くと、顔を真っ赤にしながら、俯いちゃったよ…あれ？集会の時には…

美冬「二年の「もしかして、集会の時に目が合って、顔赤くしてた

子?」あつ、ハイそうです!名前は日向美冬って言いますノノ」

あらら、また顔赤くなちゃた(苦笑)

司「ん よろしくね?

あと、俺に先生とか付けなくて良いからね」

軽く微笑みながら言うと、俯いちゃった…

まだ、風邪気味かな?

司「んじゃ、入ろうか?」

静かに少しだけ開けながら言うと、真つ赤な顔で首がそのまま、飛んで行くんじゃ…?という勢いで縦に首を振ったので、俺は静かに、第2体育館に入った

美冬side

ビ、ビ、ビツクリした、集会の時の事覚えていたなんて…ああ、思い出すと、顔が赤くなるノノ

あれ?いつの間にか、司…さんノノの周りに、女子がいっぱい…さっきの私とのやり取りと同じのをやってる…

そんな感じで、第2体育館に入って10分ぐらい経つと、いきなり…

司「一番強い人って誰かな?俺と、手合わせをしてくれないか?」

って言い出した…

この槍術部で、一番強い人って…

「この槍術部で一番強いのは、美冬だよな？二番目が麗で…」
やっぱり、そうですね…

side out

司side

へへ、美冬ちゃん強いんだ…予想外だね…（苦笑）
宮本麗が一番かなって、思ってたんだけどな…まあいいか…

司「んじゃ、お願いできる？」

美冬「は、ハイ！」

「先生、だから2対1でやって貰おうよ!？」

ええへ、なんか余計な事言ってる子が居るよ…
まあ、冴子より強いのは居ない筈だし、いいか

司「別に良いよ…手加減出来ないかもな」（苦笑）

麗「先生の相手をさせてもらう宮本麗です。」

微笑みながら言われた…うん、可愛いね

司「よろしくさっき他のみんなに言ったけど、タメ口で良いよ？」

麗「いえ、一応先生なので…（苦笑）」

ん〜じゃあ…

司「俺が勝つたら、タメ口にしてくれる？」

麗「そう言うわけには…「負けるのが怖い？」…分かりました」

黙示録の人ノリ良いね　まあ、嘲笑気味に言ったからかな？

麗「先生、防具は…「君達の攻撃は当たらないと思うから、要らない（笑）」

…そうですね。」

あつ、怒ったかな？

美冬ちゃん麗の怖さに顔青くなりながら、横に振ってるもん（笑）

麗「では、始めましょう、先生」

ちよつと、挑発し過ぎたかな…いやあな汗がでるんだけど…（苦笑）

「で、では…は、始め！」

審判の子が言い澀んでんじゃん…

麗「…」

うお！？無言で、間を詰めんなよ、怖ええよ！？

麗「槍術部を…」

…なんか、言ってる？

麗「槍術部を舐めるなああ！！！！！」

うお、ちよつ、ちよつと、これゾンビ相手に原作で使ってたよね！？
マジ危ないんだけど！？

あまりの勢いに美冬ちゃん惚けてんじゃん…

司「ハア…スピードに乗って攻撃するのは、良いんだがもうちよつと、小さく槍を回して、隙を無くそうね？とあ！？」

左肩への攻撃を避けて、右腹を横薙にしようとしたら、後ろから美冬ちゃんが、右腹を横薙にしようとしたので、攻撃を止め美冬ちゃんの攻撃を止めました…ハイ
てか、もう気が付いたのかよ…

吃驚して変な声出ちまつたじゃん！？

なんか、見学してる子達がクスクス笑ってるし…ああ、恥ずかしい
っ！！

司「危ないなあ…と

ホイホイっ」と

離し際に、麗が左腹を横薙に攻撃しようとしたので、バックステ
ップで避けながら、美冬ちゃんに向き直り右腹を横薙で攻撃し、反
転して麗の左腹を横薙しました。

麗「なっ！？早っ！？」

美冬「凄い…カッコいい／＼」

司「よしっ、終了

ああ、楽しかった

因みに麗は、もう少し振りを小さくした方が良いよ？

美冬ちゃんは全体的にバランスが良いから、もうちょっと、スピー
ドの底上げかな？」

「「「「「美冬ちゃん／麗！！？？」「「「「「

冴子「司、こんな所に私ともう一度手合わせを！」

「「「「「司！！！！？？」「「「「「

ダッ 面倒事と悟り司

が逃げた

ガシッ 冴子が司の手

を捕まえた

冴子「勝ち逃げをするつもりか？」

ちよっ！？ああ、しょうがない！！

司「明日の放課後相手してやる」

耳元で、顔を近づけながら…

冴子「なっ！？／／」

驚いた拍子に手を離す

司「冴子、適当にそこに居る奴らに、話していてくれ、じゃあに」

ええっと、今俺は帰ろうとして職員室を出た廊下に居ます…

？「あんだ、IQ200以上の天才って本当？」

ええくと、何故かまた、原作メンバーに会ってます…

司「普通、自己紹介を質問の前に持ってきませんか？高城さん」

いきなり、あれはないわ…

沙耶「あんだ、私の事知ってるじゃない」

知ってるけどさ。原作読んだから…

司「一応、ハーバードを16の時に首席で、出てるんでね。」

ふん、どうだ？凄くね？

沙耶「証拠は？」

証拠か…この機械鎧は…ダメだな…うん、

沙耶「…ピカソのフルネーム」

司「パブロ・ディエゴ・ホセー・フランシスコ・デ・パウラ・ホ
アン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリス
ピン・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・

ルイス・イ・ピカソ」

沙耶「くっ、英語記述は？」

書くのが面倒じゃん…

司「サラサラ…」

(Pablo Diego José Francisco de
Paula Juan Nepomuceno María de
los Remedios Crispin Crispiano
de la Santísima Trinidad Ruiz
y Picasso)

沙耶「良いわ…信じるわ」

んじゃ、帰って寝よう…」

司「用はそれだけ？んじゃ。」

沙耶「北里先生「タメ口で良いよ？堅苦しいのは嫌いだしね。」北
里？」司

っ、つか、さ…」

司「まあいいか…じゃあね、沙耶」

沙耶「さよなら…／／」

第四話（後書き）

次回、一気に原作開始まで飛びます

第五話

俺が、この藤美学園に来て早くも、半年が経ち今は、車から下りようとしている、車には原作開始に備えて銃（デザートイーグル、M37、P90TR、M4A1など様々）、日本刀（妖刀村正、流星（斬鉄剣）など）、重火器（グレネード、RPG7など）が後部座席に積んである…

司「そろそろかな…」

斬鉄剣と、デザートイーグル（サイレンサー付）だけでも、職員室に持って行くか…」

さてと…孝が気付くのが、五限目の途中だったからな、それまで暇だな…寝るか…zzz

ガラッ

「先生方、どなたか来て下さい、校門の所に妙な不審者が居るんですよ。」

「「分かりました。」」

ん、ふわあゝあ…ん？

もしかして、俺飯食わずに、ずっと寝てたんか…

腹減ったな…まあ良いか、沙耶達が居る教室行こ…

ふわあゝ、まだ眠いな…『ギヤアアアアアア！』あつ、今放送終

わった…あつ、沙耶とコータ見つけ

あ…俺コータに自己紹介してないわ…まあ良いか…

司「よつ、沙耶」

沙耶「ん？ああ、つ、北里先生ですか。
それなんですか？」

司「ん？これ？刀、君は…え〜と、平野君だっけ？」

コータ「あつ、ハ「刀って、あんた何学校に持って来てんのよ!？」
ハハハ…」

オ〜イ、返事しようとしていたのに、割り込むなよ、沙耶…コータ
が苦笑いしてるじゃねえか…

司「ん？何ってだから、刀？」

沙耶「なんで、疑問系なのよ…ってそうじゃなくて！なんで学校に
持って来てんのよって事よ!…」

いや、知ってるけどさ(笑)

司「…護身用？」

沙耶「だから…ハア…もう良いわ…そんな事より、今どつなってん
のよ?…」

やっぱ、気になるよね

司「…さあ？」

沙耶「さあって、どついう事よ！？さあって！？」

ああ、喚くなよ…ゾンビがこっちに来るじゃん…

司「だってさっきまで、寝てたんだもん（笑）」

まあ、知ってるけどさ…

沙耶「寝てたって…もう良いわ、んじゃ私に付いて来て、そのデブオタもよ！！」

デブオタ…もといコータは、俺と沙耶が話してる間、呆然としていた。

すると、俺に話し掛けて来た。何だろ？

コータ「北里先生「司で良いよ？先生という肩書きも意味を成さないから、呼び捨てで良い」司は、高城さんとどついう関係で？」

ん、関係か…

ピン？

沙耶も、この距離なら聞こえるな…（笑）

司「恋人だよ？」

くっくっくっ…

さあ、沙耶はどんな反応を示すかな？（笑）

コータ「えっ！そうん「なななな、何言ってるんのよ！？／／／／」
え？」

うわゝ、期待通りの反応（笑）

司「冗談だよ（笑）

でも教師と生徒って言うよりは、仲のいい友達…みたいなものかな？」

沙耶「そうよ／／バカみたいな事言ってるんで、着いたわよ。
デブオタ、ドア閉めなさいよ！！」

コータ「は、ハイ！」

バタン！！！！

うわゝ、ゾンビにこっち来いって言ってる様なもんじゃん…

沙耶「司、これで何か武器になる物作れる？」

司「ん？俺にはコレがあるから、もう武器なんて要らねえから、コータに聞いてみる、俺が考えて作ったより、コータが考えて作った方が良いだろ？沙耶は俺とコータを守るから武器は要らないとして、コータは何もないからな、コータ自身が使い易いように、自分で作った方が…な？」

まあ、デザートイーグルが有るけどな

沙耶「まあ、そうね…デブオタあんだどうせ、ガンオタだとかなん

だとか、言うキモい奴らでしょ？なら、これとかの出ていた映画とか、知ってるわよね？」

ガンオタがキモいって…俺現在進行形で、デザートイーグルがスーツの中のホルスターに入ってたけど…orz

沙耶「何、落ち込んでんの？」

何も知らない沙耶が、聞いて来た。

司「……何でも無い…」

俺らが、こんな会話をしている中、コータは「ガス式か！？」とか「何か支えになるもの…」とか言いながら、何か作り出した。

因みに、まだ俺はorzの状態である…

ガンガン！！

沙耶「ちよつと、そこまで来てるわよ！？」

バン！！

沙耶「キヤアアア！！！！」

ドアを押し倒しながら、ゾンビ…《奴ら》だったな…が入って来た。

コータは…もう少しかかりそうだな…

五匹か…

司「たくっ、一刀流居合い、獅子歌歌！！」

言わずと知れる某海賊アニメの剣士の技です（笑）

まあ、全て首を狙って斬ったけどね。

因みに、三匹しか殺ってません。

沙耶「ちょっと！後二匹残ってるわよ!？」

沙耶に言われた直後…

パスっパスっ

司「コータ、nice」

コータ「すみません、遅くなりました。」

司「いいや、ちょうど良いよ（笑）」

沙耶「ハア…」

コータ「ハハハ…」

何ため息、吐いてんだよ、幸せが逃げるぞ？

沙耶「誰のせいよ誰の!？」

何？

思考を読まれてるだど!？

沙耶はテレパスだったのか!？

沙耶「全部、声にでてんのよ!！」

司「ありゃ？」

沙耶「ハア……」

コータ「ハハハ……」

司「さて、行くか」

何時までも、漫才はやってられんしな……

沙耶「あんたのせいでしょうが!？」

何?思考を読まれてるだど!?

沙耶「だから、声にでてんのよ!!」

ああもあ、行くわよ!？」

ええ、やっと楽しくなつて来たのに……

沙耶「……」

うわ、睨まれました……

怖いよ()() ; 。 ()() ガクガク、ブルブル

沙耶「……」

あれ?突っ込み無しか……まあいいか……

第五話（後書き）

有り得ない、刀出しちゃいました（笑）

妖刀村正と斬鉄剣って有り得ないよね？やっぱり（笑）

第六話

今俺たちは（というより、沙耶は）ゾ…《奴ら》の頭に雑巾を投げている…

ペシヤ。

沙耶「…」

「ああ〜」

雑巾が当たったにも関わらず、気付いてないようだ…

司「…楽しいか？」

沙耶「（小声で）司は何してるか分かるでしょ？」

司「まあな…」

コータ「あの…なにをしているんですか？」

やっぱ、分かんないよな〜（笑）

沙耶「シッ、見てれば分かるわよ。」

といい、また沙耶は今度は、奴らの近くに有ったロッカーに雑巾をぶつけた。

ピュ…ガシヤン

「ああ〜」ガン、ガン

沙耶「ね？分かったでしょ？」

コータ「????」

ハハハ…理解不能って顔だな（笑）

司「つまり、一回目投げた時には、奴らに当たったにも関わらず、気付いて無かったのが、二回目は、ロッカーに当たったのには気付いた、つまり奴らはロッカーに雑巾が当たった音に対して反応しているから、聴覚を頼りに、俺ら人間を襲ってるって訳だ。因みに一回目に投げた雑巾が当たったにも関わらず、気付いて無かったから痛覚もない、そしてロッカーに気付かず当たっていることから、視覚もないだろうな…後、今現在、周りに奴らが居ない事から、嗅覚もあり得ない…だろ？」

沙耶「流石ね」

コータ「お二人は頭が良いんですね…」

「当たり前じゃん（俺/私）は天才な（んだから/のよ）？」

コータ「ハハハ…でも温度とかは…？」

司「後で調べれば良いだろ。」

沙耶「そうね、後で嫌と言う程調べられるでしょうね。取り敢えず、今は、職員室に司の車の鍵を取りに行きましょう。」

司「ストップ」

俺は、職員室前にゾンビが8匹程居る事に、気付き沙耶とコータに、ストップをかける

沙耶「どうしたの？」

まだ気付いて無いのか…

呆れながら、『普通』に沙耶達に喋る

司「ハア…奴らが8匹程居るんだよ…あ」

「ああ、あ〜」

あはっ、やっぱり気付かれちゃった (笑)

沙耶「笑い事じゃないわよ!？」

司「あははは (笑)

いやあ、すっかりすっかり、と俺が前に出て、奴らを殺るからコータ、沙耶を頼んだ。」

コータ「分かりました。高城さん、僕の後ろに」

沙耶「噛まれたら、アウトだからね!？噛まれないでよっ。」

ん？心配してくれんのかな、嬉しいね

司「んな、へマはしないよ。んじゃ、逝ってくる」

沙耶「字が違うわよ!？」

司「冗談冗談（笑）」

さてと、行くか!!

コト side

ふざけながら、行ったものの、司は凄かった。

何がって?…いや、強過ぎでしょ…

司「神鳴流 斬空閃!！」

何も無いところで、刀振って奴らが斬れていくんだよ!?有り得ないでしょ!?高城さんもこんなに、司が強いつて知らなかったのか、呆然としている。

あ、もう終わったみたい、早過ぎでしょ…僕必要ないじゃん…

side out

司 side

ふう…終わった終わったん?なんか、二人共呆然としといる、大丈夫か?

司「お、い、どうした?」

一応、大丈夫かどうか確認のため、手を二人の前で振る

沙耶「何よ、あれ!？」

俺の四肢の事話してないからな…当然か…

パスっ

「あ…」

コータが俺の腕（まあ機械鎧だが）を噛んでいた奴を撃つ…その直後原作メンバーが沙耶の悲鳴を聞いて、集まって来た

沙耶「いやあ、司…奴らに何てならないわよね…?」

孝「!?!高城、司から離れるんだ…」

俺が、噛まれて奴らになると思ったんだろっな…孝が沙耶を引き寄せようと、手を伸ばす…

その時、木を落としたような音が二つ聞こえた

冴子「そんな…司が…君は、私に勝つたのdarou?何故君が噛まれている…?君は…」

冴子は、途中で堪えきれなくなったのか、泣き出してしまった…

ちよつと、待つて!?

なんか俺が奴らに成る流れに…

司「ちよつ

麗「いや、嫌よ…もう私の前で誰も死なないですよ…私の大切な人を奪わないですよ…」

麗までもが、泣き出してしまった

司「って、ちょっと待てコリアア!!俺が何時奴らになると言った
!?!」

孝「でも、お前腕を食いちぎられ…あれ?」

やっと気付いたか

コータ「司、その食いちぎられた、肉の間から見える、銀色の物は
何?」

冴子 沙耶 麗「え?」

n i c eだコータ!

司「それは、職員室に入ってから話すよ。取り敢えず、言うておく
俺は、奴らには今の状態からは、絶対にならない!」

冴子 沙耶 麗 孝 コータ「!?!」

冴子「どういう事だ!?!」

うお、復活早ええな

麗「そうよ!?!どういう事!?!」

あれ、なんか俺責められてる?

司「だから、職員室の中で話すって」

呆れながら、冴子達に返すと

沙耶「良かった…良かったよ…司あ〜」

沙耶に後ろから抱きつかれました…人の目をきにしようね？沙耶…

司「ちよっ／＼／沙耶、離れて／＼／」

恥ずかしさに堪えきれなくなり、沙耶を軽く俺から離す

沙耶「うん／＼／って、べ、別にあんたが、好きとかで泣いたんじゃないからね！？／／」

うわお、涙目で上目、しかもツンデレ…ヤバい、今抱きしめたくな
った…

ふう〜取り敢えず落ち着いて…よし。平常心平常心

司「んじゃ、職員室に入ろうか？」

第六話（後書き）

なんか、沙耶のキャラが崩れたorz

悪かったな！文才なくて！！

ちよっ、すみません生意気な口きいてすみませんでした…

取り敢えず、

今回は、孝達に機械鎧の説明から入ります。

第七話（前書き）

あてがきに、アンケートをしてるので、良かったらお願いします。

第七話

ハア…

俺の体の事がバレちまったか…取り敢えず、沙耶には落ち着いてもらうためと、顔に付いた血…ミカエルが気を利かせて、ケガした時には血が出るようにしていたため、それが奴らに噛まれた時に沙耶に血が飛んで着いてしまったんだよね…てか、現実^{リアル}過ぎだろ、転生されて今までケガした事無かったから、俺までびびったわ…おっと、話がそれだな…

冴子「さあ、話してもらおう、その腕は何だ？義手…ではないよな、今まで手合わせしてきたが、義手とは思えない動きだった…」

…そうなんだよね…半年前手合わせして俺が勝ってから、俺が一人で居ようものなら、冴子に剣道場に引っ張って行かれて、手合わせしてたんだよね…

孝「おーい、大丈夫か？司？」

麗「大丈夫…？」

司「ん、大丈夫だ…まあ、待て冴子、沙耶が戻って来たら話す。二度手間はごめんだからな…」

そんな事を言ったら、沙耶が戻って来ました…もうちょっと、遅くても良かったのに…

取り敢えず、機械鎧は俺が作った事にしとくか…こいつらにミカエルの事言ってもな…

司「うしっ、これは機械鎧って言って、俺が作ったもんだ…」

全員「オートメール？」

この人数で八モると凄いな…（笑）

司「そつ、オートメール

漢字では機械鎧って書く。神経系と直接接続することによって普通の手足と同じように動かすことができるもんだ…筋電義手に近いかな？

銃器などを内蔵できて戦闘用の物も作ることが出来るが、これ以上重くなったら大変だから、つけてない…それを補う為に様々な武術や剣術なんかを極めたんだからな…」

全員「へ〜」

沙耶「神経系と直接接続って…流石に無理なんじゃ…」

やっぱ、そこ気になる？（笑）

司「それが、出来るんだな〜

腕や四肢が無くなっても、脳からの信号は神経を通って来てるから、そいつをこつちが人為的に道を作って受け取ってやれば良いんだ。」

冴子「そんな事が可能なのか？」

ん？今説明しなかったけ？

司「普通は無理です、だから、人為的に道を作ってやるんだよ。」

孝「道って?」

沙耶 side

沙耶「そうよ、その道って言うのはどこよ?」

司「あつそつか、此処も隠してるから分かんないんだった(笑) :
よいしょと」

とか、言いながら着ていたシャツを脱ぎ…

沙耶「って何、いきなり脱いでんのよ!? / /」

冴子「そうだ…何をいきなり… / /」

麗「 / /」

司「おい沙耶、顔を赤くしながら、腕を振り上げるな…それと麗は
こういうのに耐性は無かったのか…いや、さっき言ってた道を見せ
ようかと、思ってたな…」

とか、言いながらまるでセロハンテープでも剥ぐように、鎖骨の下
辺りの皮を肉とともに剥いでいく…血を出しながら…

沙耶「ちよつと!?!何をやってんのよ!?!…あれ?」

よく見ると、血は直ぐに止まっているし、本人も痛くないようだ。

それに、奴らに食いちぎられた腕と同様に鉄が見えている…

side out

孝 side

孝「司それが、さっき言った道ってやつなのか？」

肩の辺りから、少しくすんだ銀色の機械のような部分を指差ししながら、僕は司に聞く。

司「おつ、孝正解！」

おちゃらけたように、そんな事を言ってる…
どういった仕組みなんだろうか？

冴子「どんな仕組みに…というより、その機械鎧とやらは、電気を使っているのか？」

おお、僕が気になっていたことを聞いてくれて、ありがとうございます
ます

孝「ええ…と…」

そういえば、名前聞いて無かった…

冴子「ああ私は、三年の毒島冴子という。」

麗「二年の時に、剣道の全国大会で優勝したんですよね？」

えっ！？そうなの！？

冴子「1ヶ月もしない内に、その司に破れたがな…」

それを聞いた、僕と高城は、『ええ〜』って感じの視線を司に向ける

麗「あの噂ってホントだったんですか…」

？噂？

コータ「ああ、聞いた事が有ります。学校に来た初日の朝に、全国大会優勝した毒島先輩が手も足も出せない状態で、司が勝った、ってやつですよ？

しかも、その放課後に槍術部の一番強い、日向美冬さんと、二番目に強い宮本さんを同時に相手にして勝ったって聞いたんですけど…ホントの話何ですか？」

全国大会優勝に勝って、しかも今度は槍術部の部員二人を同時に相手にするって…

麗「ホントよ。噂を聞いた時は、毒島先輩を倒したのは流石に嘘かな？って思ったけど、度々毒島先輩が再戦を頼んでたようだったからね。」

孝「それで…先輩は勝ったんですか？」

恐る恐る聞くと…

冴子「くっ…203戦中1勝202敗…」

うわぁ…リアルな数字…

司「でも、一回勝ったじゃん…」

冴子「手加減してもらってやっとなー!!」

その1勝も手加減してやっとな…

冴子「そもそも、私が50敗した時から、私が木刀、司が竹刀までは、良い、しかし何故木刀が竹刀で斬れるのだ!？」

コータ「ええ…と、先輩今何て…」

うん、僕だけじゃなかったようだ…聞き間違いだよな?竹刀で木刀が『斬れる』なんて…

冴子「司は、竹刀で木刀を斬ったんだよ。」

聞き間違いじゃなかったよ…はははは(苦笑)
ありえねえだろ…

麗「お、折ったんじゃないかと、斬ったんですか?」

ああ、そうか先輩の言い間違いか。

冴子「いや、あれは斬っただ、まるで日本刀で斬ったように、綺麗な断面だった…木刀同士の時、何故か司は打ち合わないのだろう?と不思議に思っていた事が理解出来たときだった…」

昔を懐かしむお婆ちゃんみたいな先輩以外の、俺を含む全員が司を『うわ〜』て視線で見ていると…

司「そんなに見るなよ…照れりじゃん…噛んじゃた…」

orzの状態に司が入った…噛んだぐらいで（苦笑）

side out

司side

うう…噛んじゃったよ。恥ずいな…／／／

沙耶「そ、そんな事より、／／司のその腕は便利ね…あつ変な意味じゃなくて、」

何で沙耶の顔が赤いんだろ？あれ？冴子と麗もだ？何故？？

司「そうでもないよ？まあ、機械鎧は俺の作った合金を使っているから、10トンの衝撃を一点に集中的に受けてやつと傷が付く物だからな それに、最初にこの道を作って機械鎧着用の際にはかなりの激痛を伴うし、それに接続箇所の手術をする必要があるしな、しかもリハビリには長期間を必要とする」

ハガレンは何回も読んだから完全に暗記してるぜ！

麗「うわー、大変だね。」

司「うん、大変なんだよね…」

つってもお、転生されて起きたら付いてたから俺としては、手術も着用の際の痛みも知らないんだけどね（笑）

沙耶「何よ合金って？」

10トンの衝撃をしかも、一点に受けてやっとな傷が付くって有り得ないでしょ……」

口から出任せ言っとくか…素材に何使ったか知らねーもん（笑）

司「タングステンとチタン、更に鉄とダイヤモンドを細かくして混ぜたその名も………カッチン鋼だ!!」

さあ、この名を知っている人も多いよね？（笑）

沙耶「カッチン鋼って…まあ良いわ……」

司「さて、説明も終わったし、音を小さくしてテレビ点けようぜ？何か情報が流れてるかも。」

第七話（後書き）

カッチン鋼が出ました（笑）

突然ですが、アンケートです。

Q1・この先何か出して欲しい物や武術あるいは、技などは有りますか？

Q2・この後出てくる、紫藤はどうしましょう？

の二つです！！

2の方は参考にするだけなので、悪しからず…

アンケートに答えてくれる方は、感想で自分の所に送って下さい。

1の方は、無期限なので何時でも良いのですが、2の方は、2010年の10月18日の正午までとさせていただきます。どちらのアンケートもお願ひします。

今回は、バスに乗る直前か乗るまでを書きます。

第八話（前書き）

バスまでと言っていました、職員室を出るまでです……すみません

第八話

職員室に設置されているテレビを見ながら俺が言つと、麗が一番早くテレビのリモコンを見つけ出し、スイッチを入れた。すぐに音量を調整し、俺達に聞こえる程度の大きさにする。

テレビは丁度臨時ニュースが流れていた。その内容は凄まじいものだった。

奴らによる騒ぎは、床主市だけでなく日本中、そして世界中で同時に起こっていたのだ。

孝 side

僕が最も不可解だったのは、奴らによる騒ぎを“暴動”の一言で片付け、奴らが何故発生し、対処法は何なのかなどという事は一切触れていなかった。当然分かっている事がない事が殆どなのだろうが、具体的な状況を説明しないのが腑に落ちなかったのだ。

孝「暴動って何だよ、暴動って……そんな一言で片付けられる事じゃないだろ……っ！」

麗「静かに！」

すると画面が現地からの中継に切り替わる。

マイクを持った女性のリポーターが混乱の中、状況を説明している。その背後では、遺体を収納した袋を運ぶ、多くの警察官の姿が見受けられた。話している内容は、奴らについての事などではなく、被害状況や政府の動きの事ばかりで、恐らく彼女自身も何が、起こっているのか分かっていないのだろう。

だからこそ、突然の警察の発砲に異常に驚きを示したのだ

。何に向かって発砲したのか？それを彼女が確認し、カメラがそれを捉える。台車の上に乘せられていた、人間の遺体が入った収納袋が起き上がったのだ。

まるで生きている人間が上体を持ち上げるかのように。カメラがそれを数秒捉えたのが最後だった。カメラマンは、カメラを放置して逃げ出したか、襲われたのだろうかはわからないが、放置されたカメラが地面を映す中、先程の女性リポーターの甲高い断末魔のような悲鳴が木霊していた。

画面が切り替わり、テレビは中継からスタジオへと戻る。相変わらず具体的な事は何一つ述べていない事にテレビに食って掛かっても仕方がない事は分かっているが、それでも僕は叫ばずにいられたかった。

孝「それだけかよ！？」
どうしてそれだけなんだよ！？」

沙耶「パニックを恐れてるのよ」

僕は高城が言ってることの意味が、分からなかった

side out

司 side

冷静に沙耶がテレビの代わりに孝の質問に答える。次に口を開いたのは麗だった。

麗「今更……？」

沙耶「『今』だからこそよ！」

恐怖は混乱を生み出し混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら……どうやって動く死体に立ち向かえると云うの？」

自称天才だけあって、理に適ってるな……

麗「でも信じられない！ ほんの数時間で世界中がこんなになるなんて……ね、そうでしょ、孝！？絶対に安全な場所あるわよね！きつとすぐに元通りに……」

ハア……

現実を認めるよ……麗

沙耶 司「なるワケないだろ？（し〜）」

孝「二人してそんな言い方する事ないだろ？」

沙耶「だって仕方ないじゃない。感染爆発パンデミックなのよ？」

そうそう、有名なやつだと『B O O D Y M O N A Y』だよ〜

麗「パンデミック??」

何!? 麗、知らないの!?

沙耶「世界中d...」

司「世界中で同じ病気が大流行してるって事な

14世紀のペスト…ペストってのは人の体にペスト菌が入ることにより、発症する病気で、日本では感染症法により一類感染症に指定されている。

ペストは元々齧歯類：特にクマネズミだな…に流行する病気で、人間に先立ってネズミなどの間に流行が見られることが多いだが、菌を保有したネズミの血を吸ったノミ…特にケオプスネズミノミに、人が血を吸われた時にその刺し口から菌が侵入したり、感染者の血液などに含まれる菌を吸い込む事で感染する。人間、齧歯類以外に猿、兎、猫などにも感染する。

かつては高い致死性を持っていた事や罹患すると皮膚が黒くなる事から黒死病と呼ばれ、恐れられた。

他にも、1918年のスペイン風邪や、最近じゃ日本でも鳥インフルエンザや新型インフルエンザとかあったたる?

日本のそれはさほど死者は出てないが、黒死病はヨーロッパの3分の1が死んで、スペイン風邪も5000万人以上の人間が死んだぜ?」

…ふう、満足

全員（沙耶、静香以外）「…詳し過ぎじゃない？」

ん？そうかな？

あれ？流石に沙耶と静香先生も呆れてるな…

孝「ど、どうやって病気の流行は終わったんだ？」

孝の質問に今度こそは！と沙耶が答えようとするが…

静香「色々考えられるけど…人間が死に過ぎると大抵は終わりよ。感染すべき人間がいなくなるから」

はははは（苦笑）

ドンマイ、沙耶…

コータ「でも…死んだ奴は皆、動いて襲ってくるよ…？」

冴子「拡大がとまる理由はないということか…」

冴子、久しぶりに喋ったね（笑）

司「奴らの怖いところはそれだな。人が奴らか、どっちかが滅びなきやこの騒動も無くならない。」

最後に立っていたほうが勝ちってわけだが…人間と奴らとの存亡をかけたチキンレース…なんか人間負けそうだな…

静香「あ、これから暑くなるし、肉が腐って骨だけになれば動けな

くなるかも」

脳天気な感じの口調で静香が言う…

コータ「どの位で、そうなるんですか？」

時間よつては隠れた方が効率的だもんな…だけど。

静香「そうね、今の時期ならば二十日以上天気がよければ死人は白骨化するし、冬場になれば一ヶ月以上たたないと白骨化しないけど…そうとうくなくないうちに…」

司「腐るかどうか、分かったもんじゃないかな…」

孝「どういう事だ？司？」

俺に、孝が聞いてくるが

沙耶「そもそも、動いて襲ってくる死体なんて医学の対象じゃない。って意味よ、ね？」

その通りです、ハイ

司「これから、どうする？」

孝「まず、家族の無事を進路上家の近い者から確認、その後はどこか安全な場所に隠れよう。」

司「移動手段は？」

俺が孝に聞くと…

コータ「遠征用のマイクロバスがまだ有ります。確か、鍵は…有りました!！」

冴子「よし、では家族の無事を確認した後、どこに逃げ込むかが重要だな。ともかく好き勝手に動いていれば生き残れまい。チームだ、チームを組むのだ」

全員「おう!！」

全員で、意気込んで俺は自分の車の鍵をポケットに入れて職員室を後にした…

第八話（後書き）

ふう、終わった…

次回こそ、バスの辺りまで書きます!!

質問何ですが…

神鳴流に斬鉄剣って有りましたっけ？

第九話

職員室を出た後、俺達は歩きながら、小さな声で話をしていた。

沙耶「つまり、バスに乗る前に、司は『一人』で自分の車に荷物を取りに行くのね？」

これは、俺の車の中に色々と有るからだ…今の所、色々の部分が武器だ…事は言っていないよ？

麗「駄目よ！！もし噛まれたら…」

司「俺の四肢は、さっき職員室で言ってたように機械鎧だから、大丈夫…って、どうした？鳩が機関銃喰らったような顔して…」

コータ「それ…死んでるんじゃない…」

普通にツコツムなよ…

俺がイタい人みたいじゃん…

てか何で、みんな固まって…

言っただけ？

静香「聞いてませんよ？」

何！？静香先生は…

沙耶「いい加減飽きたわ…」

司「すみません…」

くっ、何か全面的に俺が悪いみたいじゃん…まあ、そうなんだけど…

沙耶「とにかく、奴らは音にだけは敏感よ、それから普通のドアなら破るくらいの腕力が有るから、気を付けて!!」

司（さて…次は何だったかな？）

ああ…思い出した、確か、もうそろそろ悲鳴がするんだよな…）

キヤアアアアアアあ!!

…ほらね？

司「行くぞ!!」

みんな答えはしなかったが、行く気満々である。

さて…場所は変わって、階段の踊り場何だけど…原作より明らかに奴らの数が、倍ぐらい居るんだけど…しょうがない…

司「ちよつと先に行く!!」

孝「なつ!?!司!?!」

沙耶「ちよつと!?!?どついう事よ!?!?」

何か後ろで孝達が何か言ってるが無視だ。

取り敢えず、踊り場に居た生徒達の近くまで行くか…

? side

今、私は『おかしく』なった人達に階段の踊り場で、囲まれている…

「卓造…」

卓造「くそ……下がってる！」

私の横には、付き合っているのか、卓造？と呼ばれた、人がバットを持って私と一緒におかしくなった人達と対峙していると…ダン！！

司「剃！…んで月歩！！」

C 9 が使ってたやつね？

「「「「「えっ！？」「」「」「」

？「司さん！？」

ものすごい音と共に突然司さんが現れた…

side out

司 side

剃と月歩を使って、いきなり目の前に現れた、司に驚く生徒達。

あれ？美冬がいる…

美冬「どうやって…」

他の生徒達も不思議そうな顔をしたり、驚愕している。

さっきまでの恐怖は、何処へ言ったのやら…

司「ちよつと待ってね？奴らを殺ってから…ね？」

思い出したかのように、全員がビクビクしだしたな…やべ、ふきそうになった（笑）

コイツ等忘れてたのかよ（笑）

司「神鳴流奥義 斬魔剣 二の太刀！ 百花繚乱！！」

技名と共に、常人では見えない速度で、『斬鉄剣』を振り回し、奴らを斬る。

一匹斬ってないが、大丈夫『ドガツ』夫…

冴子「全く、君はホントに規格外だな？」

と言いながら、『人間か？』と笑いながら言ってくるが、俺は人間だよ…orz

あんたもさり気なく、奴らの頭潰したくせに…

しばらく、orzの状態で居ると、この生徒達も俺達に付いて来る

事になった。

Orzから立ち直り、ぼくっとしていると

美冬「さっきの…神鳴流奥義 斬魔剣 二の太刀 百花繚乱でしたっけ？」

って何ですか？」

説明がめんどい…適当二流すか…

司「禁則事項です」

微笑みながら、某未来人のように言ったら、顔を背けられた…また、Orzになっちゃっよ!？」

美冬「///」

冴子「何をやっている…司は先に、荷物取りに行くのだろうか？」

司「ああ、んじゃ先に行くわ…」

Orzになる途中だった司は微妙な体制で、会話してます(笑)

美冬「何処かに行くんですか!？」

まあ、ビックリするわな…

司「ちよつと荷物取りに、俺の車にね…お願いだから付いて来る事から付いて来るなんて言わないで、くれよ?」

何も言わなかったら、美冬ちゃん付いて来るって言いそうだからね。
…いや、何か今でも言いそうだわ…
さつさと、行くか

司「んじゃ、先に行くな?」

美冬「ちよつ!?!」

美冬ちゃんが、何か言おうとしたが、刹、瞬歩、縮地などのあらゆる移動手段を使い逃げた。

・
・
・

んで、今車に乗せてた武器を全て、持っている…ん?どつやっか
つて? 『めだ ボツ ス』 にでていた、暗器だよ…
外からは、全く見えません! 凄くね!?

『めだ ボツ ス』 見ながら、物理的に無理だろ。とか思ったんだ
が…
いや〜凄いな?

司「さて…行くか…」

と、バスの所に行こうとしたが…

カーーン!!

忘れてたー!!?

長い棒をぶつけて、音を出すなよ…って「走れ!!」忠告キレイさっぱり忘れてたわ!?!?って、孝の声か…

司「急ぐか!」

side out

沙耶 side

どっかの馬鹿が、あんな響く音鳴らすから…

沙耶「司が居たら…」

コータ「高城さん!?!」

沙耶「!?!?なっ!?!?」

考え事をしていたせいか、全く気付かなかった…

冴子「今は走るんだ!高城君!!」

沙耶「分かってるわよ!!」

でも、数が多過ぎるから、走りにくいのよ!!」

ああ、もう!!

これも全部あの馬鹿のせいよ!

何だかんだ言いながらも、バスにたどり着いたが司が来てなかった
ので待つていたら…

「……………待つてくれっ!!」

冴子「三年A組の紫藤だな」

麗「…紫藤」

彼奴嫌いなものよね…

何か、宮本とも何か因縁有るみたいだし…

静香「もう出せるわよ!!」

ちよっ!?!まだ、司が来てないわよ!?

孝「司も来てません!もう少し待つてください!!」

静香「前にも来てる!

集まり過ぎると動かせなくなる!!」

孝「踏み潰せば、良いじゃないですか!?!」

小室「…やっぱり馬鹿ね…」

沙耶「この車じゃ何人も踏んだら横転するわよ。」

side out

さて…やっぱりこうゆう風に多い場合は…

司「神鳴流奥義 斬魔剣 二の太刀 百花繚乱！
二刀流108煩惱鳳！！」

実際、三刀流なんだけど、二本で出来ました（笑）因みに、斬鉄剣と妖刀村正のコラボ…

司「ふう、さて…シュッ
出して良いですよ？」

縮地で、バスに乗り静香先生に出発を促す…

静香「あっハイ」

さて、町へと出発だ…

第九話（後書き）

さて、次はガソリンスタンドの辺りまで、ですかね。

感想まっけてまゝす

第十話（前書き）

先ずは、遅くなってすみません…

それと、紫藤は原作通り、生徒を一人犠牲にしているという設定で
お願いします。

第十話

紫藤「……………助かりました

リーダーは毒島さんですか？」

冴子「そんな者は居ない。逃げる為に協力しあっただけだ。」

ハア…乗って早々『リーダーが必要』ってやつか…コイツ小学生か？

静香「もう人間じゃない……………人間じゃない！！！」

オオ…吃驚した…

紫藤「それはいけませんね……………生き残るためにはリーダーが絶対に必要です。目的をハッキリさせ秩序を守らせるリーダーが……………」

ああ…麗にしたことをわかってんのかね？…コイツすんげえ腹たつわ

麗「後悔するわよ…

絶対に後悔するわよ！！！」

孝side

麗「後悔するわよ…

絶対に後悔するわよ！！！」

麗が何を言っているのか、訳が分からなかった…紫藤は、司や静香先生と同じ教師一緒に居れば、少なからず、役にたつ筈だしな…

side out

司side

あつ孝、絶対『訳分かんねー』って顔だ(笑)

「だからよおつこのまま進んだって危険なだけだつてば!!
だいたいよお!!…!」

うお…うるせえな、いきなり声を荒げるなよ…

「なんで、俺らまで小室たちに付き合わなけりゃいけないんだ?
お前ら勝手に街へ戻るって決めただけじゃんか、寮とか学校の中で、安全な所を探せば良かったんじゃないのか!？」

いきなり、乗って来て何言つてんだコイツ…

「そつだよ…このまま進んだって危ないだけだよ…どこかに立て籠もつたほうが…さっきのコンビニとか…」

「今からだつて遅くない!
だいたい俺は」

ハア…うぎつてーな…『キッ』うっ!いひなり、ブレーキはへるか
ら、ひた、きゃんだ…

静香「もう、いい加減にしてよ！
こんなんじゃ運転なんか出来ない！！」

「んだよおっ！
何見てんだやろうってか！」

わあ、いつの不良の突っかかり方だよ（苦笑）

冴子「ならば君はどうしたいのだ？」

「うっ……気にいらねーんだよ！
こいつが、気にいらねーんだ！！
何なんだ、エラそうにしゃがって！！」

いや、まずは冴子の問いに答えるよ……

孝「なにがだよ？」

俺がいつお前に何か言ったよ？」

「てめえっ！なん……」

『ドフッ』わ、痛そう。

みんなに出来ない事を平然とやる、どっかの赤い悪魔みたいだ（笑）

麗「…最低」

紫藤「実にお見事！

素晴らしいチームワークですね、小室君 宮本さん！

しかし……こうして争いが起こるのは、私の意見の証明にもなってま

す。

だからリーダーが必要ですよ。

我々には!!!」

沙耶「で？候補者は、一人きりなワケ？」

紫藤「私は教師ですよ？」

高城さん、そして皆さんは学生です。それだけで資格の有無は……」

司「間違っているぞ!？」

紫藤!!!」

某仮面の正義の味方（笑）

紫藤「な、何が間違っているんですか？」

北里先生が教師という点でしたら、教育実習生という扱いなので、教師の私より生徒を纏めるのは劣っているかと思いますが？」

司「先ず教師は俺とお前以外にも、静香が居るだろうが、タコ。

それにお前は自分の身の為に、生徒を一人犠牲にしているがろうが。

バスの中の全員が紫藤を見る。

紫藤「なっ何を言ってるんですか？北里先生、あなたがバスに来たのは、私達がバスに乗る寸前だったじゃないですか。

私には、全く身に覚えがありませんね…何を根拠に……」

馬鹿が、言い淀んでんじゃねえか……

司「確かにな…だが、俺の記憶ではな、紫藤以外は息を切らしなが

ら、バスに走って行ってたのにお前だけは、後ろで悠々と歩いてたよな？

何故だ？」

紫藤「そつそれは……」

司「生徒の一人を犠牲にして、奴らがそいつの方に集まって、安全を確信したからじゃないのか？」

紫藤「っ！」

司「これだけでも、お前がリーダーに相応しくないのは、一目瞭然だな？ だいたいリーダーってなんだよ……お前は小学生か？」

「ホントなの先生!？」

「嘘ですよね!! 先生!？」

司「次いでだからよ、聞いておくれ……」

紫藤に付いて来た生徒達がいるが無視して、紫藤に質問をする。

紫藤「な……何ですか？」

司「お前………麗を留年させた張本人だろ？」

麗の事を知っている孝達は、その言葉に驚愕する。

紫藤「なっ……なにを根拠に……」

司「根拠ね…お前の父親は、国会議員の紫藤一郎だよな？
大方ソイツに言われてやったんだろ？」

麗の父親は、警察官だからお前の親父の裏金か、なんかの表に出たら、国会議員を辞めさせられるようなやつがバレそうになったから、麗を留年させてそれを敬遠したって所だろ？」

沙耶「そんな事で…」

紫藤「ふっ…確かにそんな事だが、私達紫藤の家を終わらせる材料だからね。アイツに従ったのさ。」

オロツ？

簡単に認めたな…

麗「…認めたわね…！」

紫藤に向かおうとするが…

冴子「ちよつと待ってもらっても良いかな？宮本君。
自分の家を終わらせる、とは？」

麗は、一瞬冴子を睨んだが直ぐに了承した。

紫藤「私にはね。

腹違いの弟が居てね。

その弟は私より劣っているしかし、アイツは私ではなく、東京に居る弟に継がせました。

母をないがしろにし、

その事から、酒に母は走り死んだ…なのに！愛人に作らせたもう一人の子供に！！

しかし私はね、逆らわずにアイツに従いましたよ」

孝「ちょっと待ってよ。親父に腹がたってるなら、むしろ逆に逆らうんじゃないのか？」

司「いや、紫藤の父親は強い権力を握っているから逆らっても意味がなかったんだ。

だから、おそらく…弱みを掴むため…だろ？」

紫藤「北里先生、あなたは本当に頭がいい、そうです。…父はあまりにも強い権力を握っていましたがね！

だから、私はむしろさらに協力するようにしたんですよ！！

もちろん北里先生が考えているように、弱みを掴むためです！！
それを材料にいつか奴を…いいえ。

私を含めた紫藤という家そのものを破滅させるために！！

もちろん宮本さんには、何の恨みもありません。しかし、紫藤という家を破滅えと導く、道標のひと『ドガツ』ちゆがっ」

喋ってる途中で司が殴る

司「いい加減苛々してきたから殴らせてもらった。悪いな麗先に殴ってしまって…」

麗「いえ…」

さて、そろそろバスが突っ込んで来るだろな…

司「静香、ちょっとドア開けてくれるか？」

バスが突っ込んで来る前に、TNTでも仕掛けて、横転させるか…

静香「ん？はあ〜い。」

ドアが開いたところを見て俺が外に出て、バスが来るであろう、方向にTNTを仕掛けるため、軽く小走りで行っている…

麗「何処行くんですか!？」

麗が付いて来た…

これって…

司「麗!？」

今すぐバスに戻れ!!」

麗「嫌っ!!司は何処に行くつもり!？」

お前みたいに紫藤が嫌で、どっか行くってのはねえよ!

司「何処も行かねえよ」

麗「えっ?」

予想外と言わんばかりにキョトンとするな!

司「だからっ『ぷわあん!!』『なっ!?!』」

ちよっ、早くね!?

まだ仕掛けてないんだけど!?

くそっ、この距離だとトンネルの方が近いじゃねえか!!

司「ちっ、麗来い!!」

麗「えっ？何っ…／／」

あっ？何赤くなってるんだ？手え握ったぐらいで…
俺達がトンネルの前に行くと、後ろから…

『ドツ！

ガシヤアアア！！

ゴン！！！！

ゴオ！！！！！！』

上から順に

車に当たり横転する音

横転した状態で、慣性の法則により滑る音

滑って来たバスがトンネルに当たる音

バスから火の手が上がる音

孝「司あ！麗！！大丈夫か！？」

司「ああ！俺も麗も大丈夫だ！！

だが、そちらに行くのは無理そうだから先に行って何処かで落ち合
おう！！」

孝「分かった！

だったら、警察で…東署で落ち合おう！場所は麗が知っている！！」

司「時間は？」

孝「午後5時に！！」

今日が無理なら、明日の同じ時間で！！」

司「分かった！」

っ！？孝！ここから急いで離れる！！何時バスのガソリンに引火するか分からん！！」

忘れてた、危ない

孝「分かった！」

んじゃ、俺らも…

司「麗、急ぐぞー！！」

そお、言つて俺らはトンネルを出ると…

『ドオオオオオオン！！！！！！！！！！』

麗「あつ危なかつたね…」

確か、土手の上から…

つて！？

司「麗！しゃがんで耳塞げ！！」

麗「へっ！？うっうん！！」

麗がしゃがんだのを確認し、徹甲弾を装填したM700を構え…

『タアアアンツ！！！！ドサッ』

麗「へ？ふえええ！？」

お前はどっかの白い悪魔か…

司「さて、ソイツがメットを被っているって事は…有った！…麗！
！」

俺はバイクに跨り麗を呼ぶ。

司「さて、行くか…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417o/>

学園黙示録～機械鎧の男～

2010年12月1日14時50分発行